

## マルクス理論における方法論的本質主義の一側面について

山口 拓 美

## はじめに

本稿は、カール・ポパーによって与えられた「方法論的本質主義」という規定を導きの糸として、マルクス理論における方法上の問題を再考しようとするものである。ここで、方法上の問題とは、事物の生成の必然性を示すことに係る問題であり、学的認識と政治的实践または倫理的行為との区別に係る問題である。ヘーゲル弁証法とマルクス弁証法の区別、科学と実践の区別に関しては、我が国においてこれまでに多くの議論が存在したが、方法論的本質主義という規定は、かかる問題領域に対してより広い、したがってより有利な見地を提供してくれるものと考えられる。

## 一 方法論的本質主義とは何か

カール・ポパーは、『ヒストリシズムの貧困』の中でヒストリシズム批判の一論点として、事物をその本質によって説明しようとする見地を取り上げ、これを方法論的本質主義(methodological essentialism)と呼んだ。<sup>(1)</sup>ポパー自身の回

想によれば、同書の執筆中にこの論点をより詳細に論じ始めたことが一つの契機となって、ほぼ同時期に『開かれた社会とその敵』が誕生することとなった。ポパーはこの後の書の中で「プラトンの本質主義の、アリストテレス的翻案が、ヘーゲルのヒストリシズムひいてはマルクスのヒストリシズムに影響を与えた<sup>(3)</sup>」と記しているが、この主張は、そのまま同書の構成に対応するものとなっている。同書はマルクス批判の文献として最も著名なものの一つであるが、右のような事情は、方法論的本質主義に対する批判がポパーのマルクス批判において重要な位置を占めていたことを示しているといえる。

ポパーによれば、方法論的本質主義とは「アリストテレスによって創建された<sup>(4)</sup>」思想学派であが、この立場は主として次のような三つの研究方法から成り立っている。すなわち、(1)用語の真の意味を問うこと、(2)現象の背後に本質を問うこと、(3)事物の変化を本質の実現として把握すること、の三つである。ポパー自身は自らの議論を右のように明示的に三区分しているわけではないが、彼の本質主義批判は事実上かかる三要素の中のいずれかの側面からなされているといえる。マルクス理論の方法という本稿の立場からは、(2)と(3)が重要であるが、まず方法論的本質主義のそれぞれの側面についてポパーの主張を整理しておきたい<sup>(5)</sup>。

#### (1) 用語の真の意味を問うこと

ポパーによれば、本質主義とは、まず何よりも問いを「……とは何か」という仕方立てる立場である。この「……とは何か」という問いに対する答えが問われたものの本質であり、本質を記述する言明が問われたものの定義となる。その際、「……とは何か」という問題設定の仕方には一つの問いが含まれている。例えば、「子犬とは何か」という設問には、①子犬という用語の意味を問うこと、②子犬という用語で指示されるものの本質を問うこと、という二種類

の問いが含まれている。これに対して、ポパーは、用語の意味の追究が「辞句の末梢に拘泥する空虚な煩瑣主義<sup>(6)</sup>」をもたらししてしまうこと、用語の真の意味を定義によって確定しようとする試みは定義の無限背進に陥ってしまうこと、定義の正しさを保証するものが知的直観であるという本質主義者の主張は支持し得ないこと、これらを指摘して本質主義を批判した。そして、近代科学においては「定義は何ら重要な役割を担<sup>(7)</sup>」っておらず、それは「長い物語を短かくする<sup>(8)</sup>」ための「任意の速記的なラベル<sup>(9)</sup>」にすぎないのであり、諸科学の進歩の度合はアリストテレス的な本質主義からの解放の度合に比例している、と主張した。つまり、本質主義の影響下にある社会科学の大部分は、自然科学とは異なり未だ中世に属している、というのである。

## (2) 現象の背後に本質を問うこと

本質を問うことは、考察対象から偶然的なものを取り除き実質的なものを見出すこと、「現象の背後に横たわる実在<sup>(10)</sup>」を把握することである。私たちに対して直接的に与えられているものは、偶然的なものに覆われた現象であり、「多くのものがわれわれから隠されており、隠されているものの多くは発見されうるもの<sup>(11)</sup>」であり、科学者はこの隠された本質を発見しなければならない。ポパーによれば、マルクスはこのような意味での本質主義者であった。ポパーは、本質の記述でもって究極的説明、絶対的知識とみなすことに対しては一貫して強く否定しているが、しかし一方で彼は、隠されているものを見出すという本質主義のこの側面については、これを容認するとのコメントを残している。

マルクスの本質主義に関してポパーが批判しているのは、本質主義的方法がマルクスを誤った方向へ導いてしまった、という点である。これはマルクスの「経済学主義」をめぐる主張であるが、それは次のようなものである。

マルクスの「経済学主義」は、「社会の経済組織、われわれと自然との物質交換の組織が、あらゆる社会的制度、特に制度の歴史的発展にとって基礎的であるという主張<sup>(12)</sup>」であるが、この主張は「『基礎的』という用語が日常的な漠然とした意味で受け取られ、過度に強調されることがない限り、完全に健全で<sup>(13)</sup>」ある。ところが、マルクスは「基礎的」という用語をあまりに重大に受け取ってしまった。

「マルクスはヘーゲル主義の下で育ったから、『実体』と『現象』との古代の区別、またそれに対応している『本質的』なものと『偶然的』なものとの区別によって影響されていた。マルクスは、自分がヘーゲル（そしてカント）に加えた改良は、『実体』を（人間の物質交代を含む）物質界と同一視したこと、そして『現象』を思想や理念の世界と同一視したことにある、と見がちであった。それゆえ、すべての思想や観念は、基礎になっている本質的な実体、すなわち経済的諸条件に還元されて説明されねばならないということになる。こうした哲学的見解が他の何らかの形態の本質主義より格段に優れているわけではないのは確かである。そしてそれが方法の領域に及ぼす効果は、経済学主義の過度の強調とならざるをえないのである。なぜなら、マルクスの経済学主義の一般的重要性はいくら評価してもまず評価しきれものではないが、個々の特殊な事例では、経済的諸条件の重要性が過大に評価されやすいからである。……皮肉なことに、マルクス主義の歴史そのものが、この誇張された経済学主義を明白に反証する例を提出している<sup>(14)</sup>」

ポパーがここで指摘している反証例とは、ロシア革命のことである。ロシア革命の「成功」が、マルクスの「経済学主義」を反証し、本質主義的方法の蒙昧性を明白にした、というわけである。

### (3) 本質の実現としての変化の理解

ポパーによれば、元来「本質主義は、変化する事物の内に同一性を探知することを可能ならしめる、という根拠から導入されたもの<sup>(15)</sup>」である。すなわち、「そもそも変化について語るためには、われわれは変化したものが何であるかの同一的認定ができなければならない<sup>(16)</sup>」が、本質こそ「変化の間にも変わらないでとどまるもの<sup>(17)</sup>」であり、この変化しない本質を前提することによって、われわれは変化や発展についてはじめて語ることができる。しかし、他方で「本質はまた変化を前提にし、そのことによって歴史を前提と<sup>(18)</sup>」しもする。というのも、本質主義によれば「本質というものは当の事物に内在しているさまざまな潜在性向の総和、もしくは源泉だと解釈することができるのであり、またさまざまな変化（もしくは運動）というものはその本質がもつ隠れた潜在性向の実在化、あるいは現実化だと解釈することができる<sup>(19)</sup>」からである。したがって、「ある事物、つまりその変化しない本質は、その事物の諸変化を通じて初めて認識しうるのだ<sup>(20)</sup>」ということになる。

ところで、ポパーによれば、変化についてのこのような考え方はアリストテレスの目的論的本質主義に由来する。彼はアリストテレスのこの理論を次のように記している。

「アリストテレスは、感知されうる事物はその目的因または終点に向かって運動していくとし、そして目的因や終点を感知されうる事物の形相または本質と同一視する。また彼は生物学者として、感知されうる事物は、自分自身のうちに潜在的にその最終状態または本質のいわば種子を宿している、と仮定する。……アリストテレスにとって、あらゆる運動や変化は、事物の本質に内在する幾つかの潜勢力の実現を意味する<sup>(21)</sup>」

ポパーによれば、アリストテレスの右記のような本質主義は「壮大なヒストリシズムの哲学を綿密化するために必要なあらゆる要素を含んでいた<sup>(22)</sup>」のだが、これを十二分に利用したのが「現代のすべてのヒストリシズムの源である

ヘーゲル<sup>(23)</sup>であった。かくして、本質主義は「社会諸科学が歴史的方法を採用しなければならないという主張、すなわちヒストリシズムの主張を支持するもつとも強力な議論のいくつかを、提供するもの<sup>(24)</sup>」であると結論される。

ここで、ヒストリシズムとは、未来の展開を予測するために歴史発展の諸法則を理解しようと努める態度であり、その中心教説をポパーは「歴史は特有の歴史的ないし進化的諸法則に支配されており、それを発見すれば人間の運命の予言が可能になるだろうという教説<sup>(25)</sup>」と規定する。かかる教説がポパーによって『ヒストリシズムの貧困』および『開かれた社会とその敵』で批判の主要な標的とされたことはいうまでもない。ポパーは、後の方の書で、マルクスの史的唯物論に相異なる二つの側面、すなわち①ヒストリシズムと②経済学主義があることを指摘し、②に対しては先にみたように一定の評価を与えたが、①については「破棄されねばならないものである<sup>(26)</sup>」と断じたのであった。

さて、以上のようなポパーの本質主義論のうち、(1)用語の真の意味を問うこと、に関しては、ポパーは「定義や『用語の意味』の問題が、直接、ヒストリシズムに関係することはない<sup>(27)</sup>」と述べ、マルクス理論をこの側面から直接に批判することはしていない。この側面からポパーが批判の対象としているのは、「合理主義者」のマルクスではなく、主として「神託的不合理主義」の「神託的哲学」であり、またヴィトゲンシュタインの哲学であった<sup>(28)</sup>。したがって、本質主義の第一の側面は、ポパーの本質主義批判にとっては大きな比重を占めるとはいえ、本稿の関心にとってはさしあたり対象外となる。

次に、(2)現象の背後に本質を問うこと、に関しては、マルクスがかかる意味で本質主義者であったことは、マルクス経済学の立場から見ても疑うべくもない事実である。マルクスは、科学について『資本論』の中で次のように記している。

「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するなら、あらゆる科学は余計なものであらう<sup>(29)</sup>」



そして、自身の最大の発見の一つである労働力の価値に関する部分では、次のように述べている。

「現象となって現われてくる本質的關係すなわち労働力の価値および価格と区別される、『労働の価値および価格』または『労賃』という現象形態については、あらゆる現象形態とそれらの隠れた背景について言えるのと同じことが言える。現象形態は、直接に自然発生的に、普通の思考形態として再生産されるが、その隠れた背景は、科学によって始めて発見されなければならない<sup>(30)</sup>」

これらの記述からは、マルクスが自分の研究方法を、現象形態の背後に本質を発見しようとする点で、他の科学と共通する一般的な方法であるとみなしていたということが明らかに読み取れる。先に触れたように、ポパーは本質主義のこの側面に関しては『世界の本质』を理解しようと努める人々を批判するつもりはまったく<sup>(31)</sup>と言って容認している。ここで彼が批判するのは、本質による説明の性格についてである。「わたしが論難している本質主義的主張は、科学が究極的説明を目ざすという主張だけである<sup>(32)</sup>」。この知識の究極性または絶対性に関しては、本稿の後の部分で本質主義の第三の側面との関連で考察する。一方、本質主義に基づくマルクスの「経済学主義」がロシア革命によって反証された、というポパーの主張については、私はこれを別稿で主題的に論じたので、<sup>(33)</sup>本稿では立ち入ることをしない。

そこで、以下本稿で論究するのは、本質主義の第三の側面、すなわち(3)本質の実現としての変化の理解、<sup>(34)</sup>に関してである。この論点は、ヒストリシズム批判を本旨とするポパーにとって重要なだけでなく、<sup>(34)</sup>経済学のカテゴリーや共產主義社会の生成の必然性を示そうとするマルクス経済学の立場からも無視しえないものである。

## 二 方法論的本質主義の目的論的性格

ポパーによって提示されたアリストテレス↓ヘーゲル↓マルクスという本質主義の思想史的連関は、マルクスの方法を再考しようとするとき、一つの有用な視角を提供してくれる<sup>(35)</sup>。というのも、アリストテレスはヘーゲル以上に広い領域に対して影響を及ぼしたので、彼に遡ることにより拡大された世界の中にマルクスを置くことができるし、その一方で彼の術語はヘーゲルのそれほど複雑に分化していないので、思想史上の本質的な連関を見失わずに考察を進めることができるし、また、彼の思想はヘーゲルに比べてより唯物論的なので「足で立たせる」ような手続きに悩まされることがなく本質主義を抽出しそれをマルクス理論と比較することができるからである。以下では、まず、ポパーの見解とは別に改めて本稿の立場からアリストテレスの思想を整理し、その上で、彼の本質主義とヘーゲルおよびマルクスのヒストリシズムとの関係を検討していくことにしたい。

### (1) アリストテレスの目的論的本質主義

アリストテレスによれば、学的認識（エピステーメー）とは、普遍的で必然的なものを対象とし、それらの原因を概念的に把握することである。その際、原因にはそれが生成・消滅する事物である場合、①事物の基体であり事物がそれから生成するところの質料因、②事物がそもそも何であるか（本質）に対応する形相因、③事物の生成の始まりである始動因、④事物の生成の終わりであり善であり事物がそれのためにであるところの目的因、の四種類がある。だが、これら四原因のうち②③④はしばしば一つにされ、形相によって代表される。また、事物の生成は、可能態（デュナミス）においてあるものが現実態（エネルゲイア）または完全現実態（エンテレケイア）においてあることとして規定され



る。だから、事物の本質は質料において可能態が現実態へと展開することの内に存することになるが、このとき、事物の生成は本質すなわち目的を前提としており、可能態の現実化は目的の実現を意味する。つまり、生成するものは目的すなわち終わりに向かって進展するのであり、現実態は終わりなのである。

こうした基礎概念は、アリストテレスによってあらゆる事物の考察に動員される。例えば、動物や植物などの自然的事物は、それ自身に内在する原理によって「連続的に運動して或る終りに達する事物」<sup>(36)</sup>であるが、この生成過程では、質料としての自然よりも形相(目的)としての自然が、可能態においてある自然よりも完全現実態においてある自然が、より多く自然であるとされる。また、生物は霊魂と身体との結合体であるが、霊魂は生物の質料ではなく形相であり現実態であるから、「霊魂は可能的に生命を持つ自然的物体の第一の現実態である」<sup>(37)</sup>と定義される。さらに、精液は可能態において霊魂であり、「動物は精液から発生する」<sup>(38)</sup>のであるが、しかし生成は実体のためであるのであり、精液は生成で動物は実体であるから「精液よりその目的とする動物の方が先のものなのである」<sup>(39)</sup>ということになる。そして、神は質料を伴わない純粹形相であり、現実態であり、自らは動かないが他のすべてのものがそれを目指して動くところの目的、すなわち不動の動者である、と規定されている。

このように、アリストテレスの哲学においては、目的論的な構想があらゆる考察の主導原理となっている。<sup>(40)</sup>

## (2) ヘーゲルの目的論的歴史哲学

さて、以上のようなアリストテレスの目的論的構想は、ヘーゲルによって世界史の哲学的な叙述に利用されている。ヘーゲルによれば、「世界の歴史とは、精神が本来の自己をしだいに正確に知っていく過程を叙述するもの」<sup>(41)</sup>であるが、「精神の実体ないし本質は自由で」<sup>(42)</sup>あり、「精神の自由の実現は、……世界の究極目的」<sup>(43)</sup>である。そして「萌芽の

うちに樹木の全性質や果実の味と形がふくまれるように、精神の最初の一步のうちに、歴史の全体が潜在的にふくま<sup>(44)</sup>れ」ており、「有機物が自己を生産し、潜在的な可能性を形にあらわ<sup>(45)</sup>すように、「精神も、同様に、みずから形をつくっていくものであり、潜在的なものを顕在化させる<sup>(46)</sup>」ものなのである。そして、このような自由の実現過程である世界史において、東洋、ギリシャ、ローマおよびゲルマン世界はそれぞれ歴史の幼年期、青年期、壮年期および老年期に対応させられる。ヘーゲル自身が立ち会っているのは老年期である。しかし「自然における老年期は弱さをあらわすが、精神の老年期は完全な成熟の時期であって、精神は、まさに精神として統一をとりもどす<sup>(47)</sup>」のであり、かくして「わたしたちは、歴史の最終段階であるわたしたちの世界、わたしたちの時代にやっ<sup>(48)</sup>て」来たのだ、とされる。

ここには、ポパーの主張するように、アリストテレスの影響を明瞭に見て取ることができる。しかし、この歴史哲学には、ヘーゲルを「現代のすべてのヒストリシズムの源」とするポパーの主張とは合致しない部分もある。というのも、ポパーのいうヒストリシズムとは、未来を予測すること、歴史法則に支配されている人類の運命を予言すること、これを主要な構成要素とするのであるが、ヘーゲルは決して未来の予言などしなかったからである。<sup>(49)</sup>ヘーゲルにとって歴史はすでにその目的を実現し「最終段階」に達してしまったのであって、彼は歴史の終わりから過去を振り返り、歴史過程を目的論的に構成しただけなのである。ポパーは、ヘーゲルが当時のプロシアを事実上歴史の最終段階とみなしていることに言及している。<sup>(50)</sup>だが、それにもかかわらず、ポパーはヘーゲルが歴史予言をしなかったことについて立ち入って論じることをしていない。<sup>(51)</sup>この点は、ヒストリシズム批判の趣旨からすると手落ちであるように思われる。しかし、それ以上に本稿の立場から興味深いのは、ヘーゲルにおける歴史予言の不在が歴史哲学へのアリストテレス主義の採用に由来していると考えられる点である。そこで、今一度アリストテレスに立ち帰って、目的論的本質主義の基本構造を分析してみることにはしたい。

### (3) 目的論的本質主義の基本構造

アリストテレスの本質主義は、事物の生成を可能態の現実態への展開として理解するものである。ここで、現実態とは、事物が現に活動していること、働いていること、完成して現存していることを意味する。『形而上学』第九巻でアリストテレスは次のように述べている。

「働き（エルゴン）は終り（テロス）であり、そして現実態は働きである、だからまた現実態（エネルゲイア）という語も、働きという語から派生し、完全現実態（エンテレケイア）を指摘しているのである」<sup>(52)</sup>

このように、現実態は終わりであり目的である。それゆえ可能態は現実態のために存在する。これに関してアリストテレスは次のような例をあげている。

「人々が建築技能をもつのは、建築活動をなさんがためにであり、理論的な研究能力をもつのは、理論的な研究をなさんがためにである」<sup>(53)</sup>

そして、こうした文脈の中で、アリストテレスは可能態と現実態の先後関係について論究し、可能態よりも現実態の方がより先にあると主張する。アリストテレスのこの議論は、目的論的本質主義の基本構造の特徴を際立たせるものとなっている。そこで『形而上学』第九巻第八章で展開されているこの議論をここでより立ち入って検討してみなければならぬが、その際、例としてマルクス理論のカテゴリーである「労働力」と「労働」を用いる。というのも、労働力と労働は可能態と現実態だからである。

マルクスは労働と労働力の関係について次のように記している。

「労働力の売り手は、労働することによって、『現実』自己を発現する労働力、労働者となるが、彼はそれ以前には『潜勢的に』そうであったにすぎない」<sup>(54)</sup>

マルクスのドイツ語原文では、右文中の『現実』はエネルギーに対応するラテン語が、『潜勢的に』はデュナミスに対応するラテン語が用いられている。マルクスはアリストテレスの基礎概念である現実態と可能態に即して労働と労働力というカテゴリーを用いたと考えられる。

さて、労働と労働力の先後関係については、まず第一に次のことがいえる。労働力の価値規定には労働力の養成費も入ってくるが、特定の労働力の養成のためには特定の労働部門における現実の労働の存在が前提となる。したがって、労働が労働力に先行する。

しかし第二に、個別の労働者を時間の流れの中で見てみれば、労働力が労働に先行しているといえる。なぜなら、子供は学校で一定の技能を身につけた後、はじめて現実に労働するようになるからである。とはいえ、労働者を階級の観点から見ると、やはり可能的な労働者（子供）よりも現実の労働者（親）の方が先である。なぜなら、子供は親から生まれるからである。

最後に、定義ないし説明方式（ロゴス）においては、労働が労働力に先行する。なぜなら、労働力とは労働することの可能なことであり、したがって、労働とは何かについての規定が労働力とは何かについての規定に対して前提となっているからである。

アリストテレスは以上のような考察を根拠として、現実態の方が可能態よりも先である、と主張する。事物の生成の必然性を示そうとするマルクス経済学にとって、この議論は決して無視することのできないものであると思われる。

事物の生成の必然性を本質主義的に説明する場合、その説明はより先のものである現実態すなわち終わりから遡っての説明とならざるをえない。可能態は現実態と結びつけられてはじめて必然性の構成要素となる。もし現実態を

伴っていないとすれば、可能態を生成の必然性の説明に用いることはできないであろう。例えば、幼児を前にしてその将来の可能性を想像する場合、そこには無数の可能性を数えうるが、それらは実現しないこともありうる単なる可能性であって、必然性の説明に組み入れられる可能態とは異なるものである。しかし、医者として働いている現在から遡ってみれば、幼児の中に医者としての可能態を見だし、必然性の説明に組み入れることは可能であろう。また例えば、動物の胚と成体は可能態と現実態の関係にあるが、胚発生過程はその実現が繰り返し観察されてきた過程であり、したがって生成の必然性の説明が可能である<sup>(55)</sup>。これに対して歴史過程は一回的な過程である。しかし、例えばフランス革命のような出来事がいったん現実起こってしまったえば、その生成の必然性を目的論的に説明することは可能であろう。それゆえ、生成の必然性の本質主義的説明は、すでに終わりを知っている者が行う終わりからの説明である、といわなければならない。

目的論的本質主義の基本構造が以上のようなものであるとすれば、ヘーゲルがアリストテレスの本質主義を歴史哲学に適用したとき、それが現在から過去を振り返る終わりからの説明となったことは当然の帰結であった。そして、ヘーゲルが歴史予言をしなかったのは、方法的に正当な処理だったといえる。本質主義を前提するかぎり、予言には学的認識の対象となる何の現実態もないからである。

このようなアリストテレスの目的論的本質主義は、さらにマルクスにおいても維持されていると考えられる。マルクスは『資本論』第一巻第一章で「貨幣形態の発生を立証<sup>(56)</sup>」しているが、この立証が完了した後、彼は次のように記している。

「人間の生活の諸形態についての省察は、したがってそれらの科学的分析もまた、一般に、現実の発展とは反対の道をたどる。この分析は『あとから』始まり、それゆえ発展過程の完成した諸結果から始まる<sup>(57)</sup>」

この一節から推すかぎり、マルクスは現象の背後に本質を問うことだけでなく、本質の実現として発展を理解する点でも本質主義者であったと考えられる。このことは、マルクスが貨幣論において価値尺度、流通手段、貨幣蓄藏、支払手段と論を進め、そして最後の世界貨幣に至って「貨幣の定在様式はその概念にふさわしいものになる」<sup>(58)</sup>と本質主義的に述べていることによって支持されるであろう。貨幣はその概念すなわち本質（目的）を実現し完成してしまっていたので、マルクスはそれを科学的に分析しその生成の必然性を示すことができたのである。

それでは、資本主義の崩壊、共産主義の生成の必然性についてはどうなのであるか。マルクスの時代に共産主義は、それが思想ではなくて現実の一社会であるかぎりには、未だ生成していなかったし、資本主義も未だ崩壊していなかった。それにもかかわらず、マルクスはこれらの崩壊と生成を主張したとされている。そして、事実マルクスはかかる主張をしたと思われる。しかも、端初↓進展（第一の否定）↓終結（否定の否定）というヘーゲルの本質主義的な方法<sup>(59)</sup>を用いて、マルクスは次のように資本主義の未来を記した。

「資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である」<sup>(60)</sup>

ヘーゲルにとって、歴史の終結はすでに眼前に現存していたが、マルクスにとって右のような否定の否定は未だ現存していなかったように思われる。それにもかかわらず否定の否定を主張したとすれば、それはいかなる根拠に基づくものなのであろうか。

この問題を考察するに当たっては、まず、これまでに提出された諸見解を検討してみる必要があるが、それらの中で、本稿の関心にとって最も示唆的なのは、許萬元氏が『ヘーゲル弁証法の本質』<sup>(61)</sup>で展開した所説である。



### 三 マルクス理論における方法論的本質主義の性格

#### (1) ヘーゲルとマルクスの弁証法の相違に関する許萬元氏の見解

許萬元氏によれば、ヘーゲルの弁証法は内在的弁証法、歴史主義的弁証法および総体性の弁証法の有機的統一として成立しているが、これら三側面のうち歴史主義と総体主義は互いに相反した関係に立つものであり、この両側面の統一の仕方のうちにヘーゲル弁証法のマルクス弁証法との決定的な違いがある。では、歴史主義、総体主義とは弁証法のいかなる側面なのか。氏によれば、まず、歴史主義とは「理性の否定作用としての弁証法」<sup>(62)</sup>のことを指す。ヘーゲルは『小論理学』の予備概念の部分で次のように述べている。

「論理的なものは形式上三つの側面を持っている。(イ)抽象的側面あるいは悟性的側面、(ロ)弁証法的側面あるいは否定的理性の側面、(ハ)思弁的側面あるいは肯定的理性の側面がそれである」<sup>(63)</sup>

許氏によれば歴史主義とは右の(ロ)に対応する弁証法であって、「悟性はあらゆる有限なものを有限なものとして固定」<sup>(64)</sup>するが、「一切の有限なものは過渡的、歴史的な存在と見られなければならない」<sup>(65)</sup>ものであり、歴史主義的弁証法は「それらの一切の固定化せられた有限なものを、仮借なく否定の過程のうちへおいやる」<sup>(66)</sup>働きをする。これに対して、総体主義とは「有機的生命性の論理」<sup>(67)</sup>であり、ヘーゲルによる区分の(ハ)に対応する肯定的理性としての弁証法である。ここで、有機的生命の論理が肯定的なのは、それが滅亡をまぬがれるためには「自分の内につねに矛盾の調和を再生産的に永続させることができない」<sup>(68)</sup>からである。

許氏はさらに歴史主義と総体主義の弁証法を「端初→進展→終局」としての思弁的方法に結びつける。歴史主義を弁証法の第一の機能、総体主義を第二の機能とすると「第一の機能は、あらゆる悟性的『端初』をたえず『進展』の

過程のうちへ否定していくことであり、第二の機能は、『進展』の過程そのものを否定して、その肯定的成果を全面的に『総体性』として保存し組織せしめることである<sup>(69)</sup>となる。かくして「ヘーゲルは総体性や体系の立場を絶対化し、歴史主義を従属的モメントとなすことによって両者を統一しようとした<sup>(70)</sup>」と結論される。そして、氏によれば、ここにヘーゲルとマルクスとの決定的な相違がある。なぜなら、マルクスはヘーゲルとは反対に総体主義を歴史主義の従属的モメントとしたからである。

許氏のこのような見解は、本稿の問題関心にとって大変興味深いものである。というのも、弁証法における総体主義の側面からは「学問的思考の結果論的性格<sup>(71)</sup>」が導き出されるからである。この点について、許氏の見解をさらに見ていこう。

真理は全体であると主張するヘーゲルにとって「学問の対象は体系的な現実であり、『総体性』としての現実だけである<sup>(72)</sup>」が、このような現実には「潜在的可能性が完全に展開されて、もっとも具体的なものとなり、そしてまた、一つの全体としてまとまった、いわば体系的必然性を構成<sup>(73)</sup>」したときに成立する。言い換えれば、「こうした『体系』または『総体性』は全歴史的発展の結果としてのみ、つまり歴史の終局においてのみ、はじめて生成する<sup>(74)</sup>」ものである。そして「もしそうだとすれば、体系的であることを本質とする学問的認識もまた、歴史の終局となった地盤でのみ、はじめて成立する<sup>(75)</sup>」ことになる。それゆえ、学問的認識は現実の生成の後に始まるのであり、その本性において結果論的思考すなわち追思考(Nachdenken)でなければならない。

以上のような許氏の見解を通して見るかぎり、ヘーゲルの学問的認識がアリストテレス的な目的論的本質主義に貫かれていることは明らかである。この見方は、「ナーハデンケン」を根拠とする自覚的な学問的認識とは、結果を目的として前提することによって、対象を合目的に考察することである<sup>(76)</sup>という許氏の一文によってさらに強められる。

そして、許氏によれば、「ヘーゲルと同様、マルクスにおいて『学問的方法』と呼ばれるもの」も「対象の有機体論的考察<sup>(77)</sup>」であった。マルクスも「ブルジョア社会をそれ自身において完成したものと見なすばかりでなく、それまでの全歴史の最高段階として前提<sup>(78)</sup>」することができたので、「有機的総体性の弁証法を駆使<sup>(79)</sup>」して経済学批判体系を構築することができたというのである。

だが、許氏によれば、ここにヘーゲルとマルクスとの違いも存在する。ヘーゲルにとって現在は歴史の目的因すなわち終局であり、しかも「絶対的現在」として理念化された絶対的なものである。それゆえ学問的認識による体系も絶対的なものとされる。これに対して「マルクスにおいては、たとえ現実が史的に完成したとしても、それは相対的な、制限された意味においていわれているのであって、その現実自身も歴史的に自己止揚されるべき『有限なもの』と見なされる<sup>(80)</sup>」のであり、「それゆえに、マルクスにおいて現実の体系的認識が確立されたからといって、その『体系』は決して絶対的なものではなく、相対的な『体系』であるにすぎない<sup>(81)</sup>」のである。このような両者の相違は、ヘーゲルが総体主義を絶対視したのに対して、マルクスが歴史主義を絶対視したことに由来し、それはさらに「現実にたいするヘーゲルの態度が実践的ではなく、まさに理論的であったにすぎなかった<sup>(82)</sup>」のに対して、マルクスが「徹底した実践の立場を根底にすえ<sup>(83)</sup>」たことに基づいている、とされる。

さて、以上に見てきたような許萬元氏の見解からは、本稿の関心にとって有用な幾つかの論点を引き出すことができる。まず第一に、学的認識がヘーゲルだけでなくマルクスにおいても結果論的考察と見なされていること、しかし第二に、マルクスにおいてはヘーゲルとは違って学的認識が絶対的なものとは見なされていないこと、そして最後に、学的認識についてのかかる相違がマルクスの実践的立場に由来すること、以上である。そこで、以下の部分では、右の諸論点を本稿の立場から検討しながら、マルクス理論における方法論的本質主義の性格を明らかにしていきたい。

## (2) マルクス理論における方法論的本質主義の性格

マルクスの資本論体系が、ごく一部の微少な箇所を除いて、結果を目的として前提し対象を合目的に考察する終わりからの認識であることは、否定しえない事実であるといわなければならない。『資本論』第一巻の理論的考察の結論である「資本主義的蓄積の一般的法則」は、将来起こるであろう現象の予言ではなく、マルクスの時代の現実である。しかしながら、かかる「一般的法則」が予測的な機能を持たないわけではない。というのも、マルクスが学的認識の対象としたイギリスは当時資本主義の最先進国であったが、資本主義的発達の遅れた他国は、イギリスが来たと似たような道を歩むであろうと考えられたからである。それゆえ、マルクスは次のように記した。

「産業のより発展した国は、発展の遅れた国にたいして、ほかならぬその国自身の未来の姿を示している」<sup>(84)</sup>

「一国民は他の国民から学ばなければならないし、また学ぶことができる。たとえある社会が、その社会の運動の自然法則への手がかりをつかんだとしても……その社会は、自然的な発展諸段階を跳び越えることも、それらを法令で取りのぞくことも、できない。しかし、その社会は、生みの苦しみを短くし、やわらげることができる」<sup>(85)</sup>

資本主義的経済システムが、自己を国民経済の単位で有機的全体として組織化するとすれば、そしてその組織化の原理が基本的にどの国でも同一であるとすれば、先進国経済の生成を合目的的過程として叙述することは、発展の遅れた他国に対して将来の発展経路を示してくれることになる。もちろん観察事例が膨大に存在する生物の発生過程とは異なり、経済システムの生成過程に関する経験は限られたものであるし、また、生物体の構成要素である細胞が素直に全体に従属するのに対し、経済社会の構成要素である人間は否定的に振る舞うのを常としているから、<sup>(86)</sup> 発展経路の指示といってももちろんそれは生物学的な厳密なものではありえない。しかしながら、目的論的本質主義による生成の必然性の説明は、発展途上国に対して一定の展望を与え、起こるべき苦痛を小さくすることはできるであろう。

マルクス理論における本質主義は、まず第一にこのような性格を持っているといえる。

次に、学的認識の絶対性についてであるが、前に触れたように、ポパーが本質主義を否定する第一の理由は、それが究極的説明すなわち絶対的知識を求める点にあった。ポパーによれば、あらゆる理論は仮説であり「疑いえない知識（エピステーメ）」に對置されるところの推測（ドクサ）<sup>(87)</sup>なのである。マルクスが自身の理論をドクサと見なしたかどうかは別として、少なくともヘーゲル流の絶対的知識と見なしたのではないことは、許萬元氏の指摘する通りである。

しかし、ここで留意されなければならないのは、確かにマルクスは「現在」や「現実」が弁証法的な歴史過程の中にあり、自身の「体系」も相対的なものであると見なしていたとしても、それでもやはり彼の目指したものが、価値形態論や相対的剰余価値論において顕著に見られるような生成の必然性の説明であり、偶然的な説明ではなくてまさに必然的な説明であったという点である。そしてその際、彼の説明が必然的なものであることを保証するのは、やはり、説明の対象が歴史的事実としてすでに手元に与えられていること、しかもそれが「発展過程の完成した諸結果」として与えられていること、そして彼の説明が事実即した論述になっていること、これであると思われる。つまり、結果を目的として前提する合目的説明すなわち結果論的説明であることが、彼の体系の必然性ないし学問性を支えているのである。しかし、そうであるなら、マルクスが「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の中で記した「否定の否定」は、第一の否定についてはその必然性が保証されるが、第二の否定については、それが学的認識に関するものであるかぎり、必然性が保証されない、ということになる。というのも、資本主義的生産の否定は未だ現存してはいなかったのだから。それでは、この第二の否定は何を根拠として主張されたものなのであろうか。次に、この問題をマルクスの「実践的立場」を手がかりとして考察してみたい。



われわれは、ここでもまず本稿のこれまでの流儀に従って、あの本質主義の源へと立ち帰ってみることにする。

アリストテレスによれば、学的認識（エピステーメ）の対象が「それ以外の仕方においてあることのできないもの」——必然存在——であるのに対して、実践（プラクシス）は「それ以外の仕方においてあることのできるもの」——許容存在<sup>(90)</sup>——の領域に属している。そして、学問が普遍的なものを対象とし論証に従事するのに対し、実践が関わるのは個別的なものに対してである。

アリストテレスの右のような実践概念は、通常の実践についてのイメージからそれほど離れたものではない。だが、実践の本質が右のようなものであるとすれば、この領域ではそもそも生成の必然性の証明などはないことになる。これに対して許萬元氏は、「実践的唯物論」と「歴史的必然性」という概念によって実践の必然性を示そうとしている。まず前者から検討していこう。

許氏が「実践的唯物論」の根底に置くのはヘーゲルの真理概念である。ヘーゲルは言明と実在の一致をもって真理とするアリストテレスの真理観をさらに一歩進めて、次のような新たな真理観を提出した。

「より深い意味における真理は、しかし、客観が概念と同一であることである。例えば真の国家、真の芸術作品と言われる場合、そこで問題になっているのは、こうしたより深い意味の真理である。それらは、それらがあるべきものである場合、すなわち、それらの実在がそれらの概念に一致している場合、真である。こう解するとき、真実でないものは、また悪いものと呼ばれているものと同じものである。悪い人間とは、真実でない人間、すなわち人間の概念あるいは人間の使命に合わないような行為をする人間である<sup>(91)</sup>」

許氏はヘーゲルのかかる真理概念を「対象がそのあるべき姿に変えられたところのみ成立するところの実践的な概念<sup>(92)</sup>」と解釈する。そして、われわれの実践活動を、一方では「主観的なものの客観化の過程<sup>(93)</sup>」であるが、他方では



(働きかけられる対象の側では)「存在が自分自身の本質性へ、あるべき姿へ合致せしめられる過程<sup>(94)</sup>」であると理解する。それゆえ、実践活動における目的が成功的に客観的実現を得ることができるのは、目的がはじめから客観的的目的として設定された場合だけであり、したがって、目的というものは「決して主観的な恣意的選択の産物として設定せられるべきものではなく、あくまで対象自身の真理としての本質性、つまりその必然性や法則の反映として設定されたものでなければならぬ<sup>(95)</sup>」と主張する。

さて、このような実践概念は、確かに「それ以外の仕方においてあることのできるもの」というよりも、「それ以外の仕方においてあることのできないもの」すなわち必然的なもの、の領域に属しているように思われる。しかし、かかる実践のためには、「対象自身の真理としての本質性、つまりその必然性や法則」が現実存在し認識されていることが前提とされる。とすると、実践には結果論である学的認識が先行することになる。許氏自身も「変革的实践の立場は理論的認識の自己実現であり、自己検証でなければならぬ<sup>(96)</sup>」と述べている。だが、そうであるならば、実践が必然的なものであるためには、それは「現実」ないし「現在」の枠内で行われるものであることが条件となろう。なぜなら現実態において存在していないものは学的認識の対象とはならないからである。だから、未だ現実には存在していない新しいものを存在させようとする実践活動は、少なくともそれが政治的、経済的、倫理的な実践であるかぎり、必然的なものではなく、「それ以外の仕方においてあることのできる」許容的なものとなる。例えば、発展途上国の人々が先進国の事例を研究することによって必然的な発展経路を見出し、その必然性に則して政治経済的实践に乗り出したとすれば、その実践にはかなりの程度の必然性を認めることができるであろう。しかし、先進国の人々がさらなる発展を目指すとき、彼らには必然的発展経路を引き出すべき現実が与えられていないのであるから、彼らの実践は必然性に貫かれたものではなく、試行的なものとならざるをえない。もちろんその場合でも、一連の過程が終

了すれば、そこから過去を振り返ってその実践活動に必然性を見出すことはできようが。

しかし、ここで「必然性」に幾つかの種類があるとしたらどうであろうか。許萬元氏は「必然性」を歴史的必然性と体系的必然性の二種類に区別している。歴史的必然性とは「ある事物が他のものへ止揚されるべき有限性として否定的連関において示されるところの」必然性であり、体系的必然性とは「ある体系における有機体論的合目的的連関のこと」である。<sup>(98)</sup> 許氏によれば、ヘーゲルは「現実性」を体系的必然性において理解したが、マルクスにおいては逆に歴史的必然性の方が重視される。だから、実践における目的は前者の場合体系的必然性の反映として設定されることになるのに対し、後者の場合それは歴史的必然性の反映として設定されることになる。

それでは、許萬元氏のいう右のような歴史的必然性は、マルクスの「否定の否定」の必然性を根拠づけることができるであろうか。確かに「現在」の「現実」もやがては否定され、他のものへと止揚されて行くであろう有限なものであつて、そのことは決して忘れられるべきではない。だから必然性を体系的必然性と歴史的必然性に区別したことは適切な取り扱いであつたといえる。しかし、この歴史的必然性が示しているのは「資本主義もやがては他のものに取り替はれるだろう」といったような内容の乏しい命題以上のものではないように思われる。このような必然性は、必然性といつても具体的内容を含んでおらず、実践活動を限定するものとはならない。実践活動に対して必然性に則した目的を与えるためには、そこへと止揚されるべき「他のもの」の内容が明らかにされなければならない。しかし歴史的必然性は、「現在」の「現実」を否定すべきことは教えてくれるが「他のもの」の内容を示してはくれない。「他のもの」はXであるかもしれないしYであるかもしれないしZであるかもしれない。そうすると、これはむしろ「それ以外の仕方においてあることのできるもの」の領域となってしまう。ただ、もちろんこの場合でも、発展途上国と先進国とを区別しなければならない。途上国の場合、先進国の中に自分自身の未来の姿、すなわち必然性に則

した目的を見出すことができる。したがって歴史的必然性に則した否定的実践は、すみやかに体系的必然性に則した合目的実践へと吸収される。しかし、先進国の場合には、「現在」の「現実」の中に自分自身の未来の姿を見出すことはできない。したがって、歴史的必然性に則した否定的実践は、すみやかに許容存在の領域へと移行せざるをえない。してみると、以上のような許氏の議論は、マルクスの「否定の否定」の必然性の根拠づけに一面では成功しているが、他面では成功していないといえる。というのも、否定的実践についてはその必然性がいえるとしても、合目的実践についてはその必然性がいえないからであり、実践とは対象をそのあるべき姿に変えることであるはずなのに、否定だけでは対象はそのあるべき姿に変えられないであろうからである。

しかし、実践の必然性という点を別とすれば、ヘーゲルの真理観に基づいた実践的唯物論の立場からマルクスの「否定の否定」を解釈することは、本来の本質主義の立場から見て妥当な処理であり、多くの実りをもたらすであろうと思われる。というのも、ヘーゲルの真理概念は善悪の判断を含んでおり倫理的な色彩が濃厚であるが、それ以前にアリストテレスの目的論的本質主義がそもそも倫理的な体系であったからである。このことは、事物の本質がその事物にとっての目的であり、また善であるとされていることから明らかであろう。つまり、目的論的本質主義は事物の変化を理解する方法であると同時に、その倫理的意味合いについても言及できる見地なのである。<sup>(99)</sup>それゆえ、方法論的本質主義の見地を前提とするなら、マルクスのあの命題は、「第一の否定」については学的認識によってその必然性が証明されるべき性格のものであるが、「否定の否定」については倫理的側面からもその主張の基礎づけがなされるべき性格のものである、ということができであろう。例えば、疎外された現実からの解放による人間の本質の実現の要請、といったような側面から。それだから、本質主義の見地からマルクス理論を検討する場合、われわれは倫理的側面に立ち入ることが必要となるが——しかもそれはポパーによるマルクス主義批判の重要な部分がヒストリ

シズムの道徳論の批判にあることからなおさら必要となるのであるが——、しかしこの点の考察については別稿に譲らざるをえない。

さて、本稿は方法論的本質主義という見地からヘーゲルとマルクスのヒストリシズムを検討してきた。ここまでの考察で明らかとなったのは、方法論的本質主義は歴史予言に適した方法ではないということである。方法論的本質主義はその本性において追思考の立場であって、未だ現存せざるものの生成の必然性についてはそれを示すことができないのである。

# 注

- (1) カール・R・ポパー『歴史主義の貧困』久野収・市井三郎訳、中央公論社、一九六一年、四九一―六〇ページ。Karl Popper, *The Poverty of Historicism*, Routledge, London and New York, ARK Edition, 1986, pp. 26-34. なお、Historicism の訳語として歴史主義、歴史法則主義、歴史信仰等があるが、本稿では、小河原誠『ポパー——批判的合理主義』講談社（一九九七年）にならって、ヒストリシズムとした。同書一四二ページ参照。邦訳書から引用する際にもヒストリシズムと書き直した。
- (2) K・ポパー『果てしなき探求——知的自伝（下）』森博訳、岩波書店、一九九六年、二四ページ。Karl Popper, *Unended Quest: An Intellectual Autobiography*, New Edition, London, Routledge, 1992, p. 114.
- (3) カール・R・ポパー『開かれた社会とその敵 第二部』小河原誠・内田詔夫訳、未来社、一九八〇年、一一ページ。Karl Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Golden Jubilee Edition, Routledge, London, 1995, p. 231.
- (4) 前掲『歴史主義の貧困』五二ページ。Popper, *The Poverty of Historicism*, p. 28.
- (5) 前掲のポパーの三つの書と、カール・R・ポパー『推測と反駁——科学的知識の発展』藤本隆志／石垣壽郎／森博訳、一九八〇年、第三、一五、一六章（Karl R. Popper, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, Fifth edition, Routledge, London and New York, 1989, 3, 15, 16.）およびカール・R・ポパー『客観的知識——進化論的アプローチ』森博訳、木鐸社、一九七四年、第五章（Karl R. Popper, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Clarendon Press, Oxford, 1972, 5.）から。

- (6) 前掲『開かれた社会とその敵 第二部』一八ページ。 *The Open Society and its Enemies*, p. 239.
- (7) 同上、二二ページ。 *Ibid.*, p. 244.
- (8) 同上。 *Ibid.*
- (9) 同上。 *Ibid.*
- (10) 前掲『推測と反駁』一六五ページ。 *Conjectures and Refutations*, p. 104.
- (11) 同上、一六七ページ。 *Ibid.*, p. 105.
- (12) 前掲『開かれた社会とその敵 第一部』一〇一―一〇二ページ。 *The Open Society and Its Enemies*, p. 336.
- (13) 同上、一〇三ページ。 *Ibid.*
- (14) 同上、一〇三―一〇四ページ。 *Ibid.*, pp. 337-8.
- (15) 前掲『歴史主義の貧困』五九―六〇ページ。 *The Poverty of Historicism*, p. 34.
- (16) 同上、五五ページ。 *Ibid.*, p. 31.
- (17) 同上、五八ページ。 *Ibid.*, p. 33.
- (18) 同上。 *Ibid.*
- (19) 同上。 *Ibid.*
- (20) 同上、五九ページ。 *Ibid.*
- (21) 前掲『開かれた社会とその敵 第二部』一五ページ。 *The Open Society and Its Enemies*, p. 236.
- (22) 同上、一六ページ。 *Ibid.*, p. 237.
- (23) 同上、二三ページ。 *Ibid.*, p. 257.
- (24) 前掲『歴史主義の貧困』六〇ページ。 *The Poverty of Historicism*, p. 34.
- (25) 前掲『開かれた社会とその敵 第一部』二二―二三ページ。 *The Open Society and Its Enemies*, p. 8.
- (26) 前掲『開かれた社会とその敵 第二部』一〇二ページ。 *Ibid.*, p. 336.
- (27) 同上、一八ページ。 *Ibid.*, p. 239.
- (28) 同上、一八および二〇七ページ。 *Ibid.*, p. 239, p. 454.
- (29) マルクス『資本論第三巻b』資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、一九九七年、一四三六ページ。 *Marx Engels Werke, Band*

25, Dietz Verlag Berlin, 1964, S. 825.

(30) 同上『資本論第一巻a』九二四ページ。Marx Engels Werke, Band23, S. 564.

(31) 前掲『推測と反駁』一六七ページ。Conjectures and Refutations, p. 105.

(32) 同上。Ibid.

(33) 拙稿「ポパーの科学論とマルクスの歴史理論——ソ連崩壊によって反証されたものは何か」『経済貿易研究』研究所年報 No 23、一九九七年。

(34) ポパーのヒストリシズム批判にはもちろんこれ以外にも幾つかの論点がある。橋本努『自由の論法——ポパー・ミーゼス・ハイエク』創文社、二二二—二三三ページ参照。

(35) アリストテレスとヘーゲルとマルクスの思想的関係を取り扱ったものとしては次のものが示唆的である。内田弘『経済学批判要綱』の研究』新評論、一九八二年。Scott Meikle, *Essentialism in the Thought of Karl Marx*, Duckworth, London, 1985. *Marx and Aristotle: Nineteenth-century German Social Theory and Classical Antiquity*, edited by George E. McCarthy, Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 1992.

(36) 『アリストテレス全集3』(『自然学』) 出隆・岩崎允胤訳、岩波書店、一九六八年、七七ページ。

(37) 『アリストテレス全集6』(『靈魂論』) 山本光雄訳、岩波書店、一九六八年、三九ページ。

(38) 『アリストテレス全集8』(『動物部分論』) 島崎三郎訳、岩波書店、一九六九年、二七一ページ。

(39) 同上。

(40) アリストテレスの四原因説と生成理論についての要約は、主に、『自然学』第二巻、『形而上学』第一、五、七、九、一二巻からのもの。

(41) ヘーゲル『歴史哲学講義(上)』長谷川宏訳、岩波文庫、一九九四年、三九ページ。G. W. F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden*, Merkel2, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1970, S. 31.

(42) 同上、三八ページ。Ebd., S. 30.

(43) 同上、四一ページ。Ebd., S. 32.

(44) 同上、三九ページ。Ebd., S. 31.

(45) 同上、九九ページ。Ebd., S. 75.



- (46) 同上。Ebd.
- (47) 同上、一八三ページ。Ebd., S. 140.
- (48) 同上『歴史哲学講義(下)』三五一ページ、Ebd., S. 524.
- (49) ウォールター・カウフマン「ヘーゲル神話とはなにか——ポッパー批判」丘澤静也訳『現代思想』臨時増刊第六卷第一六号、青土社、参照。
- (50) 前掲『開かれた社会とその敵 第二部』五一ページ。The Open Society and Its Enemies, p. 278.
- (51) ポッパーは「ヒストリシズムは、革命家あるいはさらに改革者に対してよりも、保守的弁護者にいっそう適合する見解であると言わざるをえないであろう」と記し、「実際、ヒストリシズムは、ヘーゲルによってそうした傾向で利用された」と述べているが(同上、一九三ページ。Ibid., p. 441.)、本稿の以下の部分は、本質主義的ヒストリシズムのこうした性格をより立ち入って検討しようとするものである。
- (52) アリストテレス『形而上学(下)』出隆訳、岩波文庫、一九六一年、四二ページ。
- (53) 同上、四一ページ。
- (54) 前掲『資本論第一卷a』三〇三ページ。Marx Engels Werke, Band 23, S. 192.
- (55) 前掲『推測と反駁』六二七ページ参照。Conjectures and Refutations, p. 340.
- (56) 前掲『資本論第一卷a』八二ページ。Marx Engels Werke, Band 23, S. 62.
- (57) 同上、一二八ページ。Ebd., S. 89.
- (58) 同上、二四一ページ。Ebd., S. 156.
- (59) 『ヘーゲル全集8』武市建人訳、岩波書店、一九六一年、三七〇—三七七ページ。G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke 6, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1969, S. 561—567.
- (60) 前掲『資本論第一卷b』一三〇—一三二ページ。Marx Engels Werke, Band 23, S. 791.
- (61) 許萬元『弁証法の理論 上巻 ヘーゲル弁証法の本質』創風社、一九八八年。
- (62) 同上、九六ページ。
- (63) ケーゲル『小論理学(上)』松村一人訳、岩波文庫、一九七八年、二四〇ページ。G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke 8, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1970, S. 168.

- (64) 許萬元、前掲書、九五ページ。
- (65) 同上、八二ページ。
- (66) 同上、九五―九六ページ。
- (67) 同上、一〇九ページ。
- (68) 同上、一一三ページ。
- (69) 同上、一四九―一五〇ページ。
- (70) 同上、六七ページ。
- (71) 同上、一二〇ページ。
- (72) 同上。
- (73) 同上、一一四ページ。
- (74) 同上、一二〇ページ。
- (75) 同上。
- (76) 同上、一三三ページ。
- (77) 同上、一二三ページ。
- (78) 同上、二二七ページ。
- (79) 同上、二二三ページ。
- (80) 同上、二二八ページ。
- (81) 同上、二一九ページ。
- (82) 同上、一六九ページ。
- (83) 同上、一七二ページ。
- (84) 前掲『資本論第一卷a』一〇ページ。Marx Engels Werke, Band23, S. 12.
- (85) 同上、一二ページ。Ebd., S. 15f.
- (86) 前掲『歴史哲学講義(上)』九九ページ参照。G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke12, S. 75f.
- (87) 前掲『推測と反駁』一六五ページ。Conjectures and Refutations, p. 104.

- (88) アリストテレス『ニコマコス倫理学(上)』高田三郎訳、岩波文庫、一九七一年、二二〇ページ。
- (89) 同上。
- (90) 『アリストテレス全集13』加藤信朗訳、岩波書店、一九七三年、四〇九ページ訳者註(7) 参照。
- (91) 前掲『小論理学(下)』一一〇ページ。G.W.F.Hegel in zwanzig Bänden, Werke8, S. 369.
- (92) 許萬元、前掲書、一八二ページ。
- (93) 同上、一八三ページ。
- (94) 同上。
- (95) 同上、一八三―一八四ページ。
- (96) 同上、一八七ページ。
- (97) 同上、一一四ページ。
- (98) 同上。
- (99) 例えば、岩田靖夫「アリストテレスの目的論」(東北大学『文学部研究年報』第二六号)には、目的因の思想からの公害に対する興味深い論述が見られる。